

# 菩提山遺跡第2次

(小泉総区墓地造成に伴う調査)

# 額安寺第9・10次

(境内地拡幅・畑造成に伴う調査)

2011年

大和郡山市教育委員会

## 菩提山遺跡第2次

(小泉総区墓地造成に伴う調査)

## 額安寺第9・10次

(境内地拡張・畑造成に伴う調査)

## 例 言

1. 本書は平成13年度、平成14年度に実施した文化庁主管の国庫補助事業・市内遺跡発掘調査等事業の報告書であり、下記の調査を収める。

年 度	平成13年度		平成14年度
調 査 名	菩提山遺跡第2次	額安寺第9次	額安寺第10次
調 査 地	小泉町2641他	額田部寺町47-4他	額田部寺町50-1他
調査期間	平成13年4月12日～ 4月24日	平成14年3月13日～ 3月29日	平成15年3月4日～ 3月31日
調査面積	108㎡	65㎡	12㎡
調査原因	共同墓地造成	境内地拡幅	畑の造成
調査担当	技術吏員 濱口芳郎		
調査体制	平成13年度 教育長 山田勝美、教育部長 石橋頼茂、社会教育課長 植田博史、 課長補佐 奥田純男 平成14年度 教育長 山田勝美、教育部長 松村達志、社会教育課長 石川武史、 課長補佐 奥田純男		

2. 調査は、大和郡山市教育委員会技術吏員濱口芳郎（当時）が担当し、濱口が作成した終了報告、概報原稿等を基に現生涯学習課文化財係長服部伊久男が本書を編集、作成した。

# 目次

## I 菩提山遺跡第2次

1. 調査の契機と経過（服部）
2. 発掘調査報告
  - ①遺構（濱口）
  - ②遺物（濱口・服部）
3. まとめ（服部）

- 図 図1 調査地位置図（S = 1 : 25,000）  
図2 調査地位置図（S = 1 : 5,000）  
図3 トレンチ配置図（S = 1 : 500）  
図4 トレンチ平面図（S = 1 : 150）  
図5 トレンチ断面図（S = 1 : 75）  
図6 出土遺物実測図（S = 1 : 3）

- 写真 写真1 調査風景（北西から）  
写真2 西トレンチ全景（北から）  
写真3 西トレンチ全景（南東から）  
写真4 東トレンチ全景（北から）  
写真5 東トレンチ全景（南西から）  
写真6 出土遺物

## II 額安寺第9・10次

1. 調査の契機と経過（服部）
2. 第9次発掘調査報告
  - ①遺構（濱口）
3. 第10次発掘調査報告
  - ①遺構（濱口）
  - ②遺物（服部）
4. まとめ（服部）

- 図 図1 調査地位置図（S = 1 : 25,000）  
図2 トレンチ位置図（S = 1 : 625）  
図3 トレンチ平面図（S = 1 : 100）  
図4 掘立柱建物断面図（S = 1 : 80）  
図5 土坑2断面図（S = 1 : 40）  
図6 土塁測量図（S = 1 : 400）  
図7 トレンチ断面図（S = 1 : 60）  
図8 出土遺物（S = 1 : 4）

- 写真 写真1 調査前（南西から）  
写真2 調査風景（南から）  
写真3 調査地全景・上層（南から）  
写真4 調査地全景・上層（北東から）  
写真5 調査地全景（北東から）  
写真6 調査地全景（南東から）  
写真7 掘立柱建物1柱列（北から）  
写真8 柱穴  
写真9 柱穴  
写真10 柱穴  
写真11 土坑2全景（南から）  
写真12 土塁全景（南から）  
写真13 土塁全景（南から）  
写真14 土塁全景（北から）  
写真15 第1トレンチ全景（東から）  
写真16 第2トレンチ全景（西から）  
写真17 第2トレンチ全景（東から）  
写真18 第1トレンチ断面（北から）  
写真19 第2トレンチ出土状況（南から）  
写真20 第2トレンチ全景（南から）  
写真21 出土遺物

# I 菩提山遺跡第2次



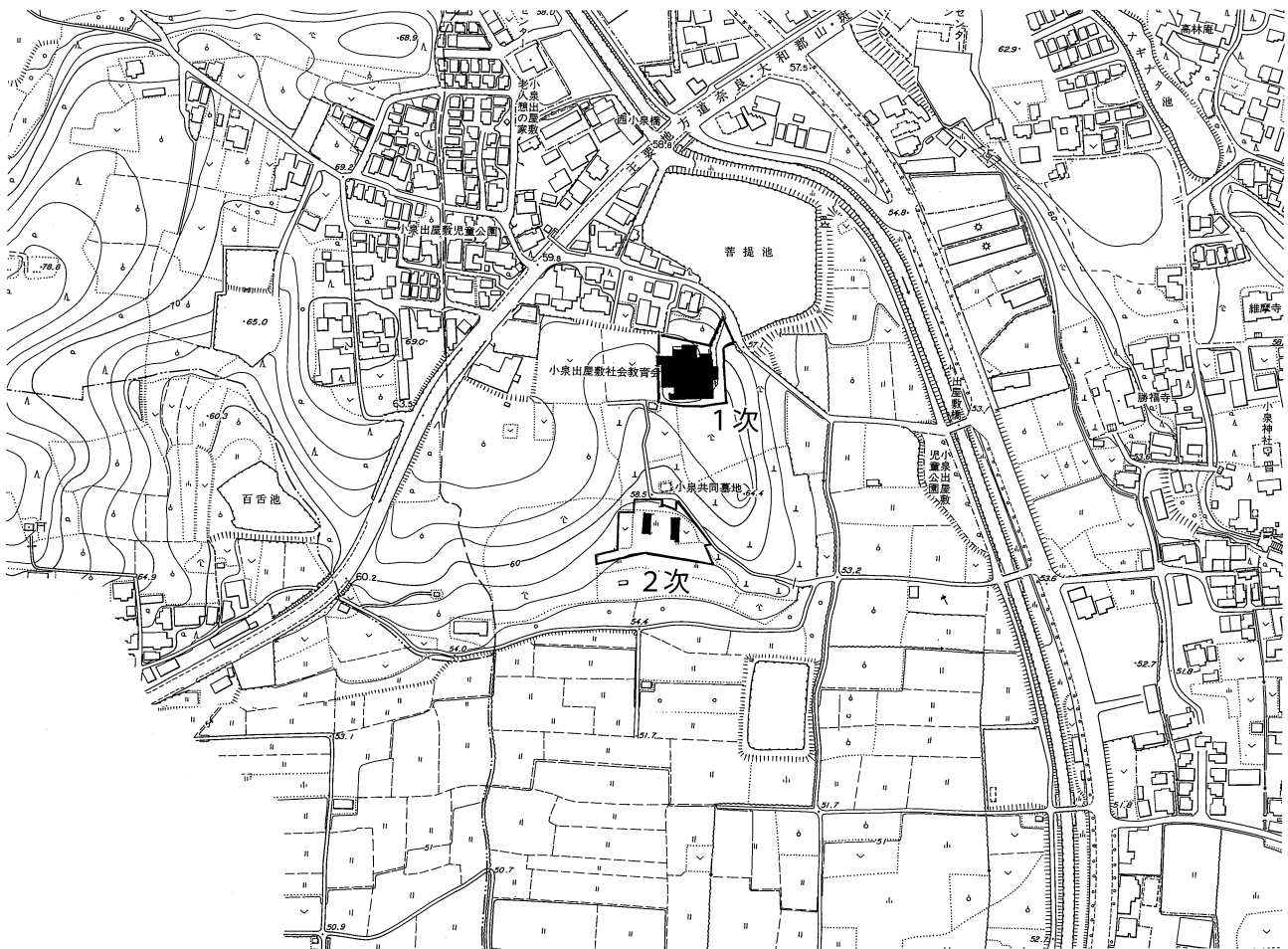


図2 調査地位置図 (S = 1 : 5,000)

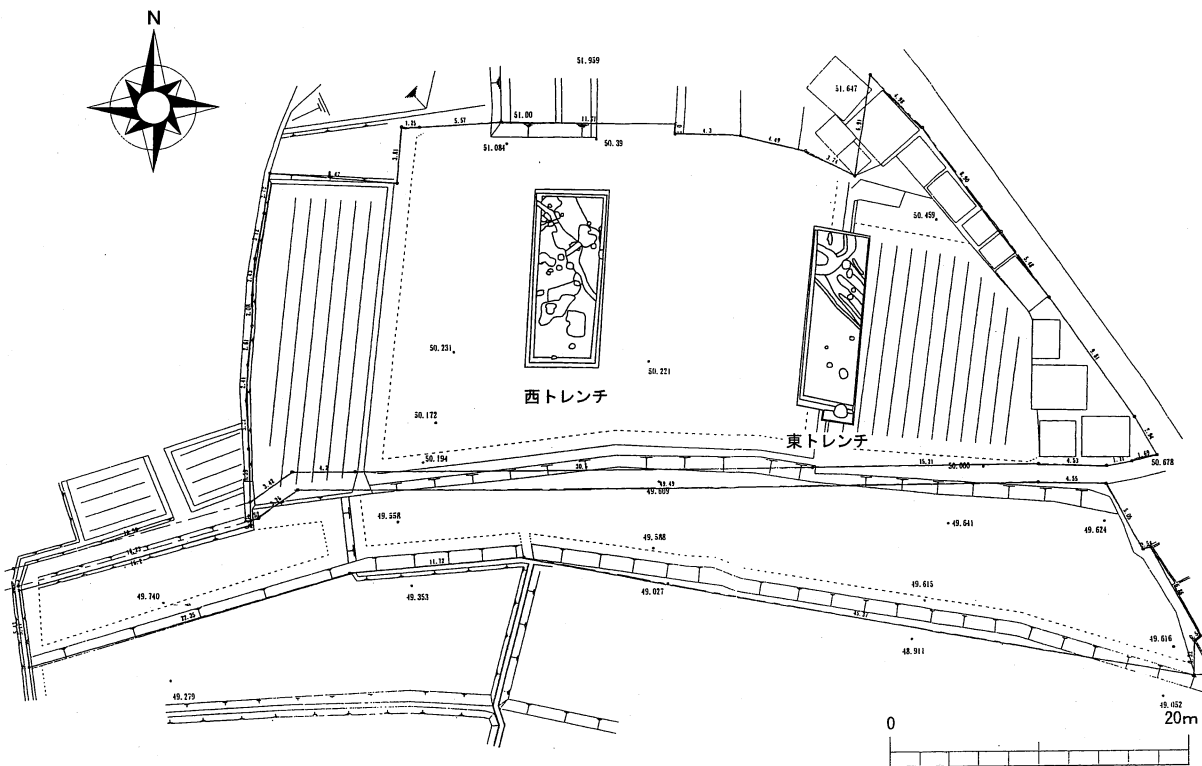


図3 トレンチ配置図 (S = 1 : 500)

## 2. 調査報告

調査対象地に2本の南北トレンチを設定した。西トレンチは東西5m、南北12m、東トレンチは東西4m、南北12mである。重機により遺構面まで掘削し、その後人力により遺構の精査、掘り下げを行った。

(層序)

現代表土(耕作土)の下に旧表土が堆積する。旧表土下には灰白色の砂礫層、そして部分的に帯水したことを示す暗灰色の粘土層が両トレンチ全体に認められた。灰白色砂礫層の下が地山面で、遺構はこの面で検出された。

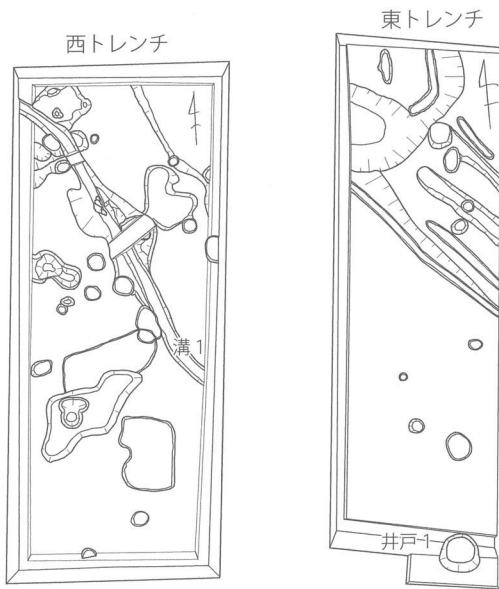


図4 トレンチ平面図 (S = 1 : 150)

### ①遺構

検出された遺構は、溝、土坑、ピット、井戸などである。

西トレンチの溝1はトレンチ北西隅から南東方向に、やや蛇行しながら直線的に掘削された、幅30cm、深さ50cmの溝である。断面形状は逆台形を呈し、灰白色、あるいは灰色の砂礫層とごく薄い暗灰色の粘土が堆積する。西トレンチでは他に不定形の浅い土坑が数ヶ所確認されている。いずれも5~20cmと浅く、また、溝1と同様の砂礫によって埋まっている。

東トレンチの溝は幅20~40cm、深さ5~10cm。井戸1は現在の耕作土直下より掘り込まれていて、直径1m、確認した深さは約1.5mである。湧水が激しく完掘は断念した。(濱口)

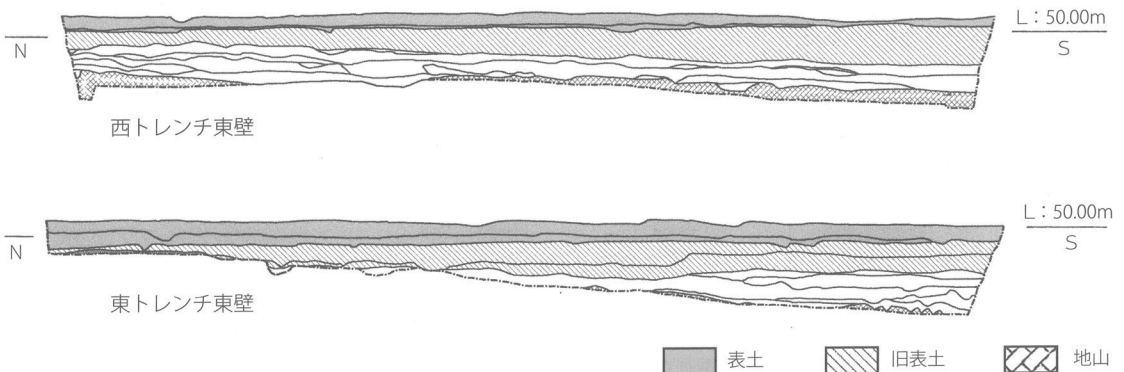


図5 トレンチ断面図 (S = 1 : 75)



## ②遺物

出土遺物の多くは土師器、須恵器、瓦類である。井戸からの出土遺物を除くと、コンテナ4箱分の出土量であるが、西トレンチからの出土がその大半である。特筆しなければならないのは、大きさを確定しうる資料は見られなかったが、通常の法量の瓦類に混じって厚さ1cm程度の小形の丸瓦、平瓦が顕著に認められることである。また、各1点ずつであるが、小形軒丸瓦が溝1から、小形軒平瓦が西トレンチの包含層から出土している。さらにごく少量ながら不定形土坑からは近世の磁器片が数点認められ、溝1からは石製塔婆の笠部が出土した。井戸からは瓦質の火鉢や磁器、レンガなどが出土し、近代以降に埋設されたものとみられる。(濱口)

**軒丸瓦** 西トレンチ溝1から出土した複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当の復元直径は9.5cm、小型の軒丸瓦である。中房は径3.8cm、数顆の蓮子が残存する。弁区は複弁の蓮華文であり、間弁を有する。外区内縁に6個の珠文が残存し、外区外縁の文様は不明。瓦当面は中央部で厚さ1.6cmをはかる。上端から二分の一ほどの位置で丸瓦部と接合し、厚く粘土を充填する。全体的に文様がシャープさに欠け、範も磨耗しているようである。焼成は甘く、灰褐色を呈する。

**軒平瓦** 西トレンチの包含層から出土した、瓦当面の幅3.4cm、復原幅は14cm前後となる小型の軒平瓦である。瓦当文様は均整唐草文と思われるが、磨耗が著しく判然としない。上外区には珠文6顆が残り、顎は曲線顎である。焼成は甘く灰白色を呈する。(服部)

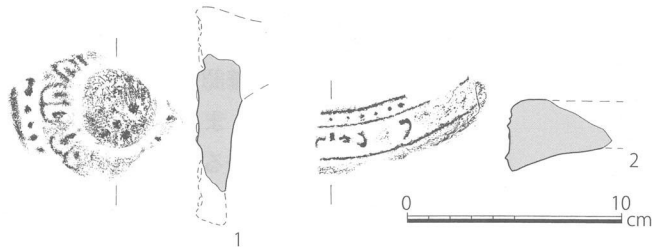


図6 出土遺物実測図 (S = 1 : 3)

## 3. まとめ

今回の調査地の隣接地で奈良時代と考えられる小型瓦が3点採集されている。複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、瓦当の直径が10.3cm。焼成がやや甘く、薄褐色を呈するという。今回出土した軒丸瓦はこれらと同範と思われる。軒平瓦の瓦当文様の詳細は不明であるが、おそらく、複弁八葉蓮華文軒丸瓦と組み合わせるものであろう。

さて、この軒丸瓦については、奈良時代中ごろの行基寺院菩提院の所用瓦と推定されているが、中房径の大きさや蓮子の構成などを含めた全体的な文様構成はさらに遡る時期の様相を強く持っている。帰属時期についてはさらなる検討を、また行基寺院菩提院との関連も改めて見直すことが必要である。

### <参考文献>

吉川真司「行基寺院菩提院とその寺田」、園田香融編『日本古代社会の史的展開』、塙書房、1999年  
大和郡山市教育委員会『菩提山遺跡発掘調査概要報告書』、大和郡山市文化財調査概要10、1988年

写真1  
調査風景（北西から）



写真2  
西トレンチ全景  
（北から）



写真3  
西トレンチ全景  
（南東から）

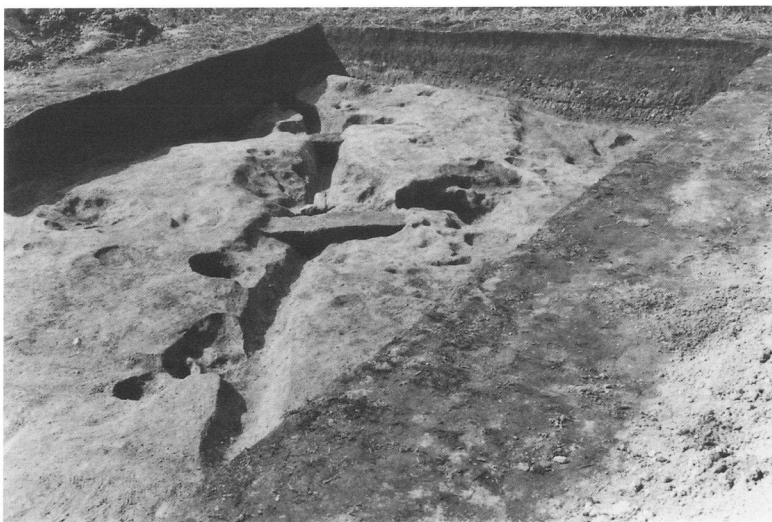




写真4  
東トレンチ全景  
(北から)



写真5  
東トレンチ全景  
(南西から)

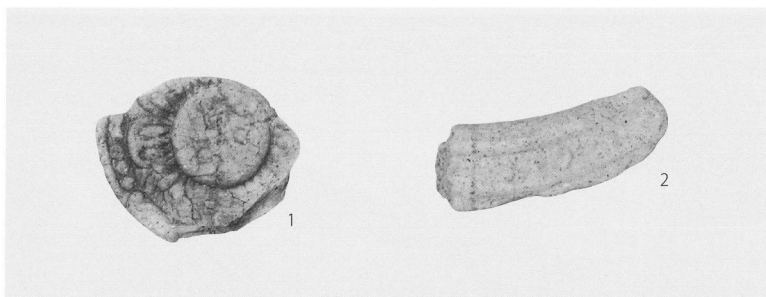


写真6  
出土遺物

## Ⅱ 額安寺第9次・10次

# 1. 調査の契機と経過

額安寺においてはこれまで下記のとおり14次にわたる調査が実施されている。今回報告する第9次調査は額安寺の境内地拡幅に伴う調査であり、調査地は境内の南西隅部の畑地である。第10次調査は、寺の西側に南北約90mにわたって残されていた土塁部分の調査である。(服部)

## 額安寺の発掘調査一覧

次数	調査地	調査原因	調査機関	調査期間	調査面積	備考・文献
1	額田部寺町36	庫裏建設	橿原考古学研究所	1975 (昭50) 7.25 ~ 8.9	140	①
2	額田部北町1305他	グラウンド造成	橿原考古学研究所	1978 (昭53) 7.17 ~ 7.21	102	②
3	額田部寺町36	収蔵庫建設	橿原考古学研究所	1979 (昭54) 7.25 ~ 8.13	35	③
4	額田部寺町36	収蔵庫建設	橿原考古学研究所	1985 (昭60) 9.10 ~ 9.26	31	④
5	額田部北町1305他	範囲確認	大和郡山市教育委員会	1995 (平7) 1.23 ~ 2.28	300	⑤
6	額田部北町1297-1他	駐車場造成	大和郡山市教育委員会	1996 (平8) 5.27 ~ 6.6	104	⑥
7	額田部北町1298他	範囲確認	大和郡山市教育委員会	1997 (平9) 3.17 ~ 3.31	30	⑤
8	額田部寺町36	墓地造成	大和郡山市教育委員会	2001 (平13) 2.13 ~ 3.31	200	⑦
9	額田部47-4他	境内地拡幅	大和郡山市教育委員会	2002 (平14) 3.13 ~ 3.29	65	本書
10	額田部50-1他	畑造成	大和郡山市教育委員会	2003 (平15) 3.4 ~ 3.31	12	本書
11	額田部寺町54-3	駐車場造成	大和郡山市教育委員会	2003 (平15) 2.12 ~ 2.20	84	—
12	額田部寺町6-1他	自治会館建設	大和郡山市教育委員会	2003 (平15) 12.17 ~ 12.22	68	—
13	額田部寺町36	庫裏建設	大和郡山市教育委員会	2004 (平16) 9.30 ~ 10.8	20	—
14	額田部寺町36	宝篋印塔解体	大和郡山市教育委員会	2009 (平21) 3.2 ~ 3.12	8	—

- ①奈良県教育委員会1979「額安寺旧境内発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1978年度』
- ②奈良県教育委員会1981「額安寺旧境内発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1979年度』
- ③奈良県教育委員会1979「額安寺旧境内発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1978年度』
- ④奈良県教育委員会1986「額安寺旧境内発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1985年度(第2分冊)』
- ⑤大和郡山市教育委員会2008「額安寺第5・7次 郡山城43次」大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
- ⑥国立歴史民俗博物館2001「考古資料編」『国立歴史民俗博物館研究報告』第88集
- ⑦大和郡山市教育委員会2003「額安寺第8次発掘調査報告書」大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集

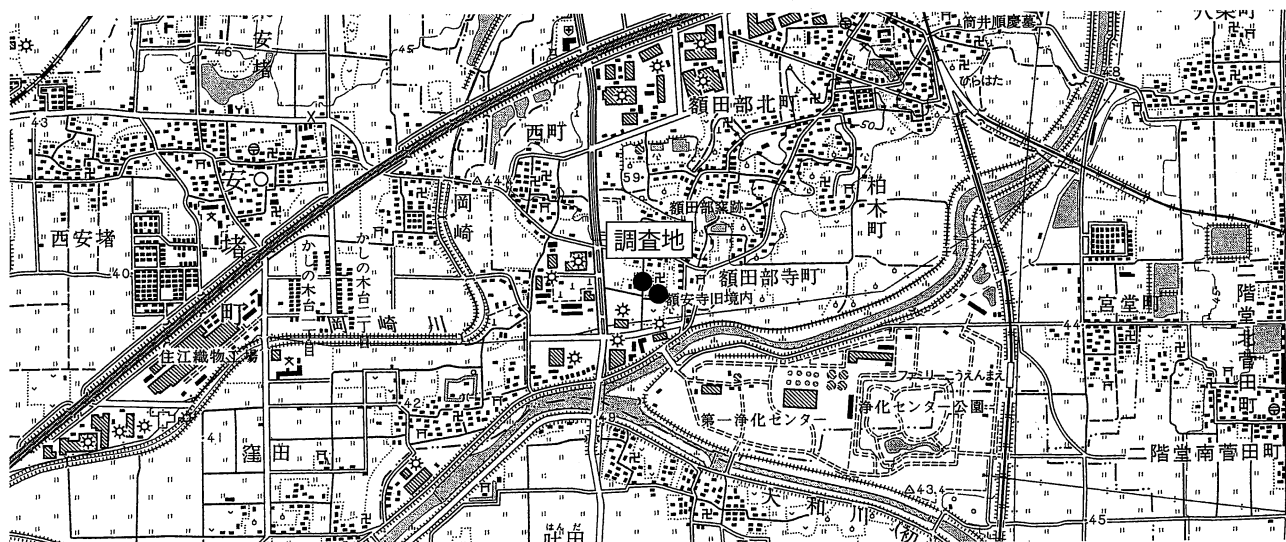


図1 調査地位置図 (S = 1 : 25,000)

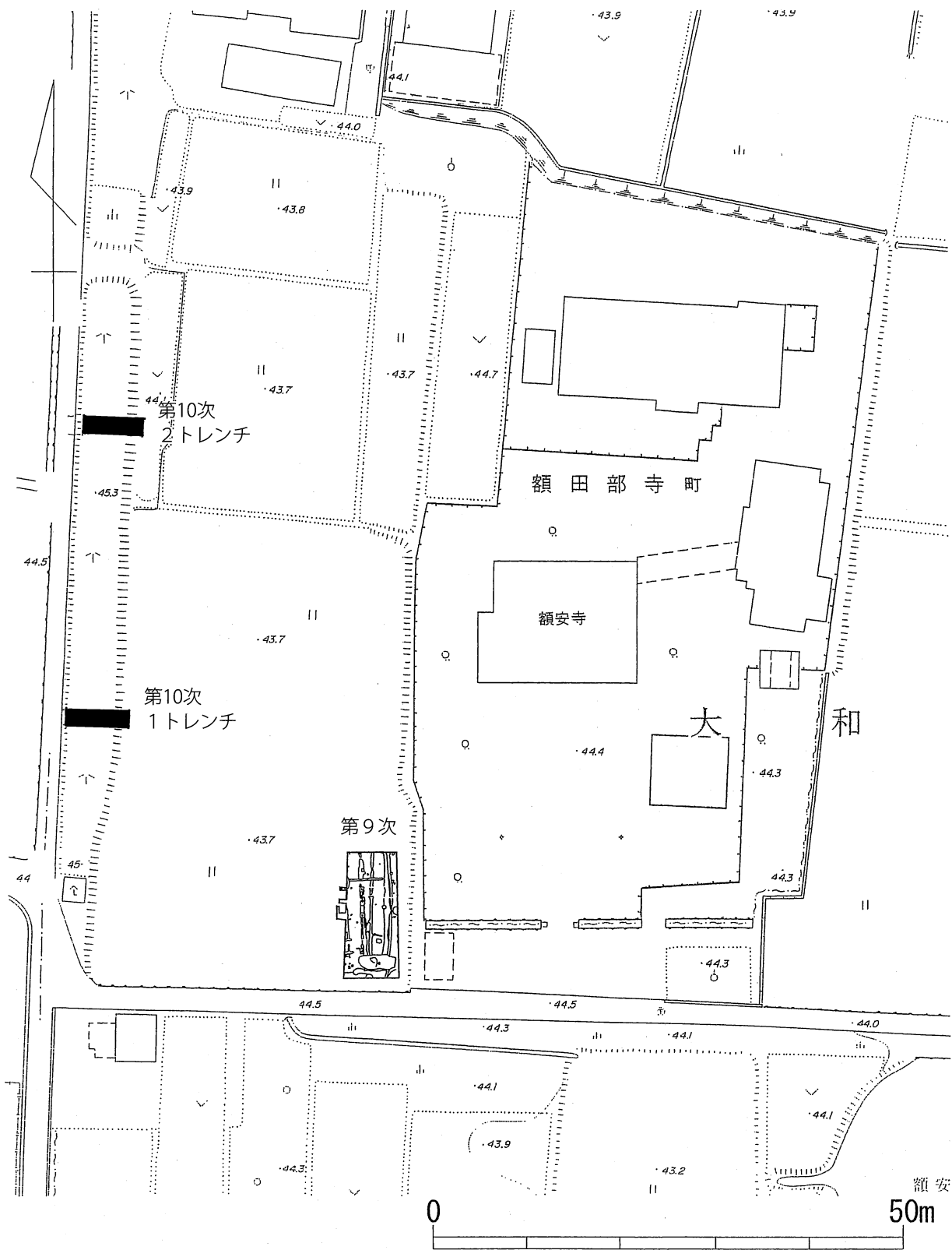


図2 トレンチ位置図 (S = 1 : 625)

## 2. 第9次発掘調査報告

額安寺境内地の拡張に伴って調査を実施した。調査は拡張予定地内に東西5m、南北13mのトレンチを設定、表土より遺構面までの掘り下げ、遺構の掘削は人力で行った。遺構面は2面を確認したが、上面では近世から現代の耕作に伴う素掘り溝、ピットなどが検出されたにすぎない。下層の遺構面からも素掘り溝等の検出をみたが、それと重複するように古代から中世期の遺構を確認することができた。主な検出遺構は、掘立柱建物跡2棟と2基の土坑である。以下、主な遺構について説明する。なお、出土遺物量はコンテナ約6箱分の瓦埴類土器類で、図化できるものはほとんどなかった。

### ①遺構

#### 掘立柱建物1

トレンチ中央部よりやや西よりに真北方向に並ぶ3つの柱穴を確認した。トレンチ西側の一部を拡張し、その結果、北列においてさらに一箇所の柱穴の一部を確認した。3つの柱穴の掘形はいずれも一辺50cmの方形を呈し、明確な柱痕を残す。南北方向の柱間隔は約1.4m、東西については拡張部の柱痕を確認していないが、2.5m前後となる。このことから建物の規模は南北2間、東西1間以上となる。掘方からは瓦と須恵器の小片が出土しており、また、南端の柱穴掘り方底部には板状の石材が礎板として据えられていた。

#### 掘立柱建物2

トレンチ北北東より南南西に並ぶ四つの柱穴と西北西に1つの柱穴を検出した。柱穴は20～50cmで大きさ、形も一定ではない。また、柱間隔にばらつきがあり、南北方向では3.5～4m前後、東西方向では3mとなる。柱穴はいずれも掘り込みが浅く、5～10cm程度である。遺物の出土はほとんど見られず、わずかに瓦と須恵器の小片が出土したにすぎない。建物の大きさは東西3m以上、南北11m以上で、1間以上×3間以上となる。

#### 土坑1

トレンチ南東隅で東西1m、南北0.6mを検出した。円形あるいは楕円形を呈する土坑とみられる。深さは30cm程度で、瓦、土師器、須恵器のほか瓦質土器の出土をみた。

#### 土坑2

トレンチ南端で検出した長径3.8m、短径1.2mの楕円形を呈する土坑である。深さは40cmである。土坑内からは瓦、土師器、須恵器、埴輪片が出土している。

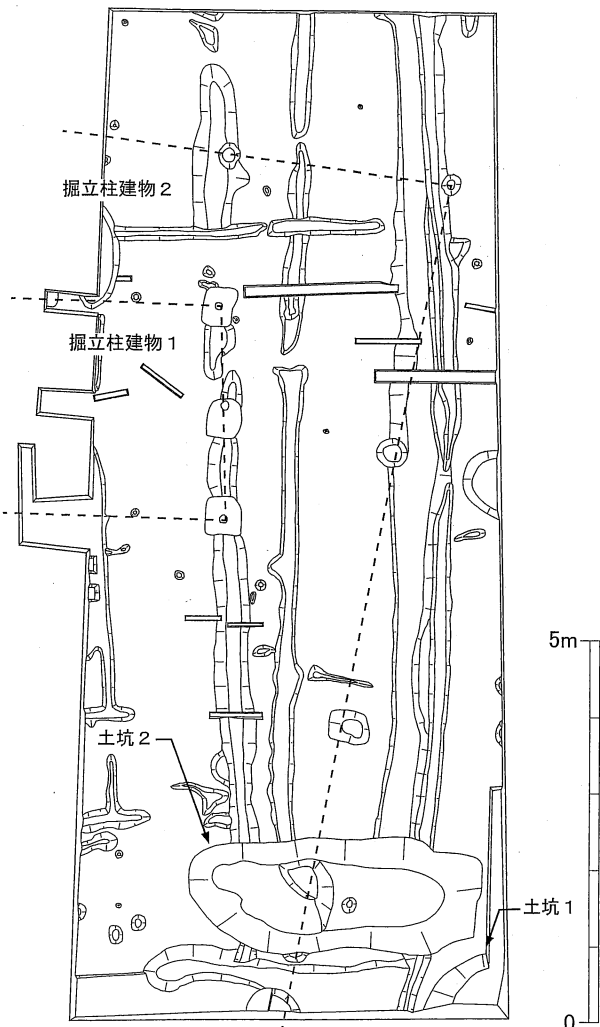


図3 トレンチ平面図 (S=1:100)

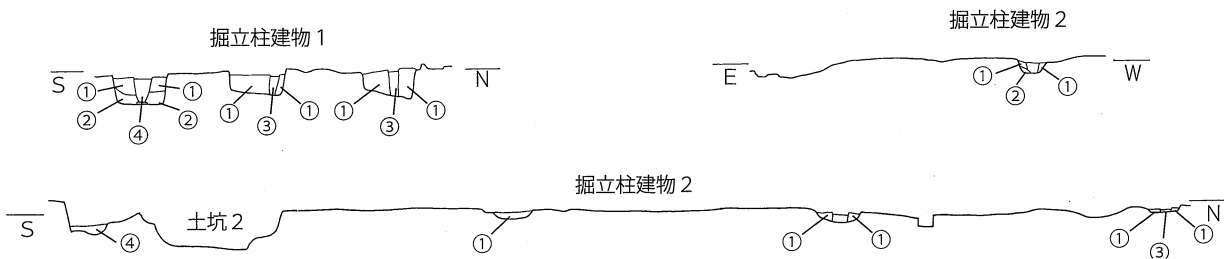


図4 掘立柱建物断面図 (S = 1 : 80)

- |                  |               |
|------------------|---------------|
| 掘立柱建物1           | 掘立柱建物2        |
| ① 灰・黄・褐色モザイク状砂混土 | ① 淡灰色砂        |
| ② 淡灰青色砂質土        | ② 淡灰色土        |
| ③ 灰・黄・褐色モザイク状土   | ③ 灰色土         |
| ④ 淡灰色粘土          | ④ 黄色粘土・淡灰色砂混土 |

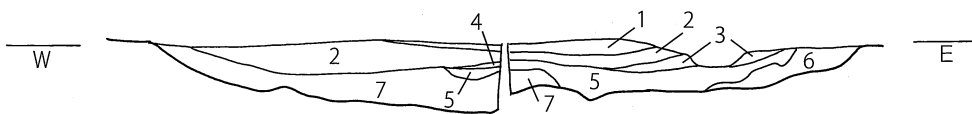


図5 土坑2断面図 (S = 1 : 40)

- |           |                 |
|-----------|-----------------|
| 1. 黄橙色土   | 5. 明灰橙色粘土       |
| 2. 淡灰橙色粘土 | 6. 明黄色・淡灰色混粘土   |
| 3. 灰褐色砂質土 | 7. 黄・灰・橙色モザイク粘土 |
| 4. (不明)   |                 |

### 3. 第10次発掘調査報告

現在の額安寺の西側に土塁が遺存しており、かつては寺の周囲を土塁が取り囲んでいたものと推定されている。第2・5次調査では、土塁そのものは削平されていたが、その土塁の西側裾に穿たれた溝が検出され、出土土器から土塁は16世紀後半に築造されたものと考えられてきた。一方で古代の築地や土塁の位置を踏襲している可能性も指摘され、その構造や築造の時期を解明することは重要な課題となっていた。今回、この土塁を削平し畑を造成することとなったためにやむなく調査にいたったものである。

まず、土塁のうえの竹木を伐採し、測量を行った。土塁は幅約7～8m、高さ約1～1.5m、南北長80数mにわたって残存している。現状での基底幅は7～8mであり、頂面には若干の凹凸があるが幅約4mの平坦面をなしている。南側が先細るように終わる。北端部近くには幅約3mの切り通しがある。土塁の西側には舗装された里道が併行してはしり、東側は畑地となっている。そのため西側の道路面からの高さは約1mであるが、東側からの高さは約1.5mをはかる。南端部に祠があり、中に墓石などが収められている。

調査は2カ所にトレンチを設定して実施した。南側を第1トレンチ、北側を第2トレンチとする。

#### ①遺構

##### 第1トレンチ

幅2m、長さ7mのトレンチ。主として東半部を掘り下げた。北壁の断面を見ると、最下面の地山が溝状に掘りぼめられているが性格は定かではない。地山上には約2.5mの堆積土・積土があるが、版築状につき固めたものではない。8・9・10層は旧表土とも考えられる土層であり、その上



部の層には近世期の遺物を含む。西半部上部には瓦の埋設が顕著な部分があり、この部分は掘り下げを行っていない。

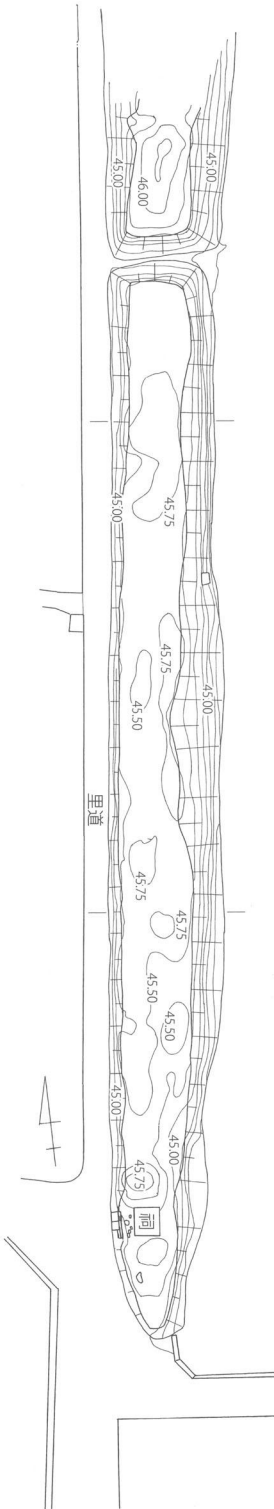


図6 土層測量図 (S = 1 : 400)

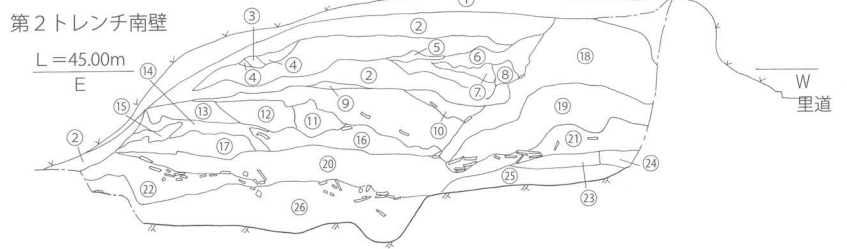
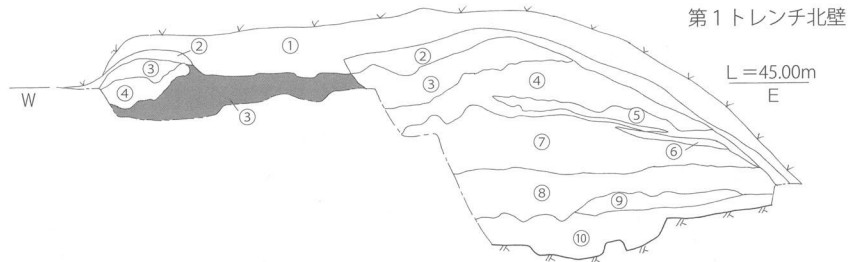


図7 トレンチ断面図 (S = 1 : 60)

第1トレンチ北壁

- ①表土
- ②茶褐色土
- ③灰白色土  
(網部瓦堆積)
- ④灰白色粘質土
- ⑤褐色土
- ⑥暗褐色砂混土
- ⑦黄褐色土
- ⑧灰茶褐色砂質土
- ⑨青褐色粘性砂層
- ⑩暗青褐色砂質土

第2トレンチ南壁

- ①表土
- ②淡褐灰色土
- ③橙白色土
- ④茶褐色土
- ⑤黄白色土
- ⑥淡褐色土
- ⑦黄白色シルト
- ⑧黄灰色混土
- ⑨黄色土
- ⑩(不明)
- ⑪白褐色砂
- ⑫淡褐色土

- ⑬黄褐色粘性土
- ⑭暗褐色土
- ⑮暗灰色粘性土
- ⑯黄褐灰色土
- ⑰褐色土
- ⑱淡橙色混褐色土
- ⑲褐色土
- ⑳淡青灰色砂質土
- ㉑白色粘土層
- ㉒淡青灰色粘性土
- ㉓青白灰色粘土
- ㉔暗褐色土
- ㉕灰色粘土層

## 第2トレンチ

幅2m、長さ6mのトレンチ。南壁の断面をみると地山が第1トレンチと同じように溝状に掘くぼめられている。その西端部は幅約50cmの溝となる。23・24・25層が当初の土塁を形成する土層で、その上部には瓦を多く含む21・22・26層が堆積する。26層上面で多量に瓦が出土しているが、近世期の瓦、陶磁器なども含まれており、現土塁は近世期に形成されたものと考えられる。

## ②遺物

1は土師器皿。口径10.4cm、器高2.4cm、胎土は密で浅黄橙色を呈する。

2・3は素弁六葉蓮華文軒丸瓦である。中房は小さく、径2.5cm程度。蓮弁は大きく、中央に稜をもつ。間弁の先端は周縁部の立ち上がりにつながる。2の焼成は良好で、暗灰黄を呈する。3の焼成は甘く、浅黄橙色を呈する。額安寺創建期の所用瓦で7世紀第2四半期に比定される。

4は瓦当面の上端が残るのみ。外区内縁に珠文帯があり、圏線を介して外縁とつながる。外縁部に文様があるが判然としない。5・6は巴文軒丸瓦。5は左巴文で、6は右巴文。いずれも巴文の尾部は圏線に接続しない。6の瓦当面には范の木目が残る。

7～9は平城宮式の系譜を引く均整唐草文軒平瓦。中心飾りの両側に三回反転する唐草文を配し、外区、脇区は珠文帯となる。7は右第一単位、8は左第二～第三単位の唐草文。9は鼻形の中心飾りである。8世紀中葉。

10・11・12は左脇区を含む端部の断片である。10、11はこれまで出土例が知られていない。12は蓮唐草文軒丸瓦で、第4次調査に類例がある。12世紀後半。

## 遺物観察表

番号	器種名	出土地点	法量等
1	土師器皿	第2トレンチ 溝	完形、口径10.4cm、器高2.4cm、胎土密、焼成良好、浅黄橙色(7.5 Y R 8./2)
2	素弁六葉蓮華文軒丸瓦	第1トレンチ 表土	胎土緻密、焼成良好、暗灰黄色(2.5 Y R 5./2)
3	素弁六葉蓮華文軒丸瓦	第2トレンチ 溝状遺構	胎土粗(長石・石英多く含む)、焼成軟、浅黄橙色(7.5 Y R 8./3)
4	巴文軒丸瓦	第2トレンチ 溝状遺構	胎土粗(長石・石英・雲母・赤色粒子を多く含む)、焼成良好、橙色(5 Y R 6./6)
5	左巴文軒丸瓦	第2トレンチ 溝状遺構	胎土緻密、焼成良好、灰色(5 Y 5./1)
6	右巴文軒丸瓦	第1トレンチ 東半灰青褐色土(第5層土塁下の旧耕作土)	胎土粗(長石・雲母多く含む)、焼成良好、灰色(N41)
7	均整唐草文軒平瓦	第1トレンチ 東半Ⅱ第4層黄灰褐色土	胎土密(長石多く含む)、焼成良好、灰色(N61)、段顎、顎部に近い丸瓦部の裏面に縄目たたきが残る。
8	均整唐草文軒平瓦	第2トレンチ 第4層 暗色土	胎土粗(長石・石英・雲母を多く含む)、焼成軟、灰色(5 Y 5./1)
9	均整唐草文軒平瓦	第2トレンチ 溝状遺構 明灰青色粘土	胎土緻密、焼成良好、灰色(N61)、段顎
10	蓮唐草文軒平瓦	第1トレンチ 表土	胎土緻密、焼成良好、灰色(5 Y 6./1)～オリーブ黒色(5 Y 3/1)、段顎
11	蓮唐草文軒平瓦	第1トレンチ 東半Ⅱ第4層黄灰褐色土	胎土密(長石多く含む)、焼成良好、灰色(5 Y 6./1)、曲線顎
12	蓮唐草文軒平瓦	第1トレンチ 東半Ⅱ第4層黄灰褐色土	胎土密、焼成良好、灰黄色(2.5 Y 6./2)～ぶい褐色(7.5 Y R 5./3)、曲線顎

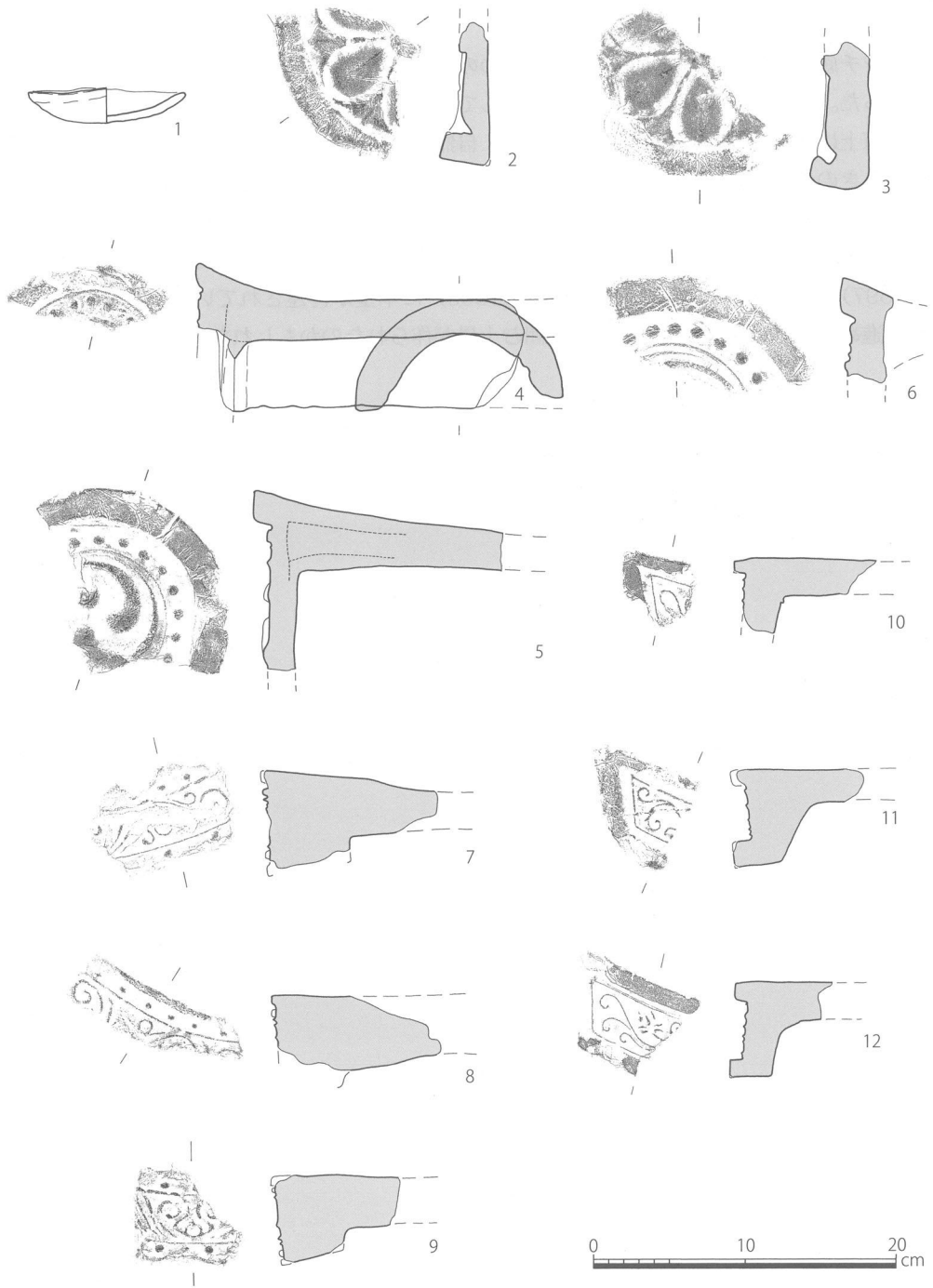


图8 出土遺物 (S = 1 : 4)

## 4. まとめ

トレンチ底の一部を地山まで掘り下げたものの、飛鳥奈良時代まで遡る時期の造作の痕跡は見出せなかった。古代の寺域については課題を残している。

地山直上には中世期の堆積が認められたが、自然堆積のような状態であり、土塁のような構築物を作るときのきつく固く叩き締めるものでもない。さらに、近世期の瓦や陶磁器を含む層によって現在の土塁が積まれていることが明らかとなった。第2トレンチの溝状遺構から出土した土師器皿、左巴文軒丸瓦の示す年代が土塁の構築時期の上限を示していると考えられる。額安寺は慶長2年（1597）に所領を安堵され、慶長11年（1606）に本堂が再建されている。この時期に境内の整備が進められ、その一環として外周を囲む土塁が作られたのかもしれない。

---

### <参考文献>

上原真人「額田寺出土瓦の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第88集（2001年）

写真1  
調査前（南西から）



写真2  
調査風景（南から）



写真3  
調査地全景・上層  
（南から）



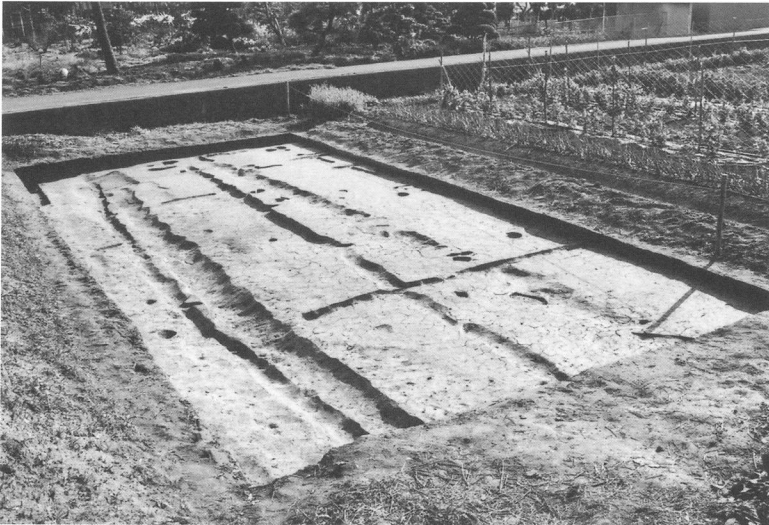


写真4  
調査地全景・上層  
(北東から)



写真5  
調査地全景  
(北東から)



写真6  
調査地全景  
(南東から)



写真7 掘立柱建物1柱列（北から）

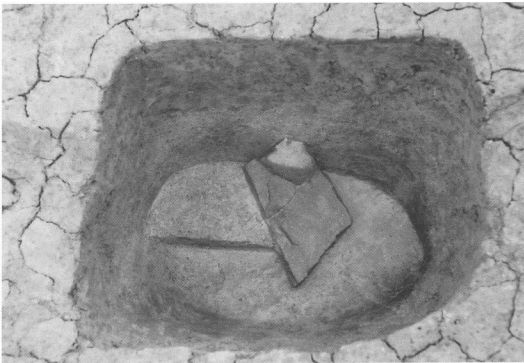


写真8 柱穴

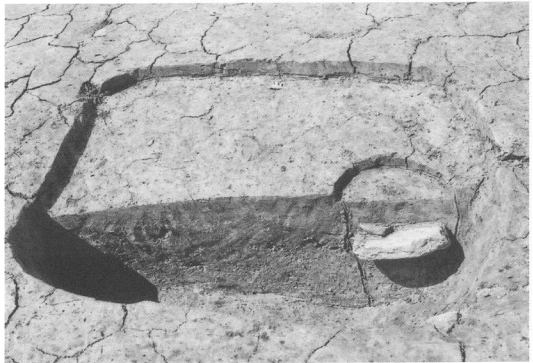


写真9 柱穴

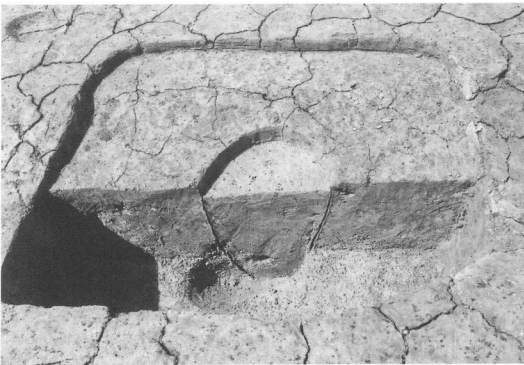


写真10 柱穴

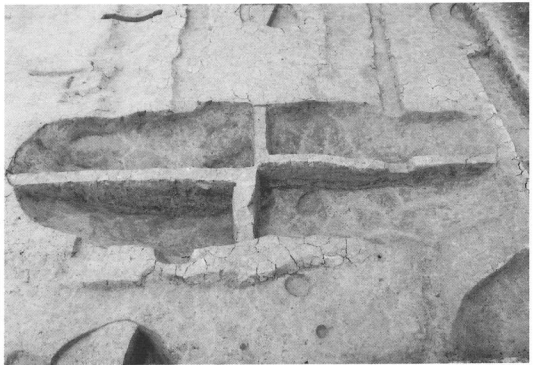


写真11 土坑2全景（南から）



写真12  
土塁全景（南から）



写真13  
土塁全景（南から）



写真14  
土塁全景（北から）





写真15 第1トレンチ全景（東から）

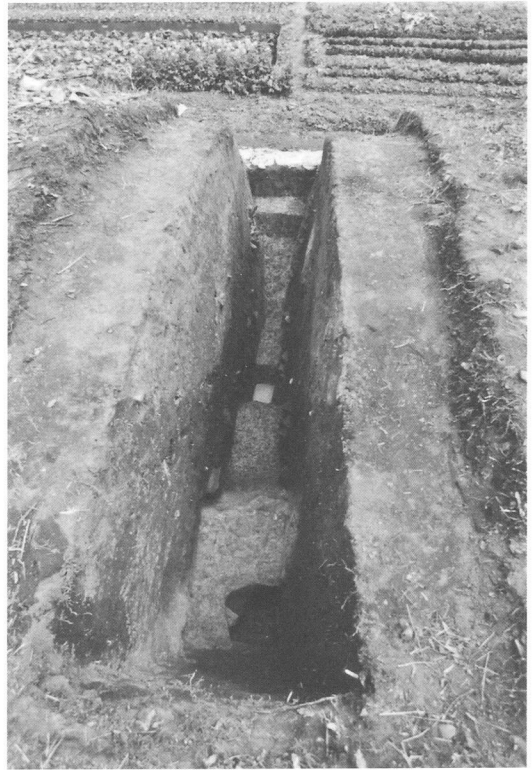


写真16 第2トレンチ全景（西から）



写真17 第2トレンチ全景（東から）



写真18  
第1トレンチ断面  
(北から)



写真19  
第2トレンチ出土状況  
(南から)



写真20  
第2トレンチ全景  
(南から)



写真21 出土遺物



報告書抄録

ふりがな	ぼだいやまいせきだいにじ・かくあんじだいきゅう・じゅうじ
書名	菩提山遺跡第2次 額安寺第9・10次
副書名	
巻次	
シリーズ名	大和郡山文化財調査報告書
シリーズ番号	第17集
編著者名	服部伊久男 ほか
編集機関	大和郡山市教育委員会
所在地	〒639-1198 大和郡山市北郡山町248-4
発行年月日	2011.3.31

所収遺跡名	<small>ぼだいやまいせき</small> 菩提山遺跡 (第2次)	<small>かくあんじ</small> 額安寺 (第9次)	<small>かくあんじ</small> 額安寺 (第10次)
所在地	<small>こいずみちよう</small> 小泉町2641ほか	<small>ぬかたべてらまち</small> 額田部寺町47-4	<small>ぬかたべてらまち</small> 額田部寺町50-1ほか
市町村	29203	29203	29203
遺跡番号	—	—	—
北緯	34-37-29	34-36-2	34-36-3
東経	135-45-1	135-46-19	135-46-18
調査期間	平成13(2001)年 4月12日～4月24日	平成14(2002)年 3月13日～3月29日	平成15(2003)年 3月4日～3月31日
調査面積	108㎡	60㎡	12㎡
調査原因	共同墓地造成	境内地拡幅	畑の造成
種別	寺院	寺院	寺院
主な時代	奈良、中世	白鳳・奈良	白鳳・奈良
主な遺構	溝、土坑、井戸	掘立柱建物、土坑	土塁
主な遺物	小型軒丸瓦	須恵器・土師器	瓦
特記事項			

大和郡山市文化財調査報告書第17集

**菩提山遺跡第2次  
額安寺第9・10次**

2011年3月31日

編 集	大和郡山市北郡山町248-4
発 行 者	大和郡山市教育委員会
印 刷 者	共同精版印刷株式会社 奈良市三条大路2丁目2-6